

平成 29 年 6 月 23 日現在

機関番号：12501

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2015～2016

課題番号：15H06088

研究課題名(和文) 真理の機能主義に関する統合的研究の基礎

研究課題名(英文) Some Bases for a Comprehensive Study on the Alethic Functionalism

研究代表者

秋葉 剛史 (Akiba, Takeshi)

千葉大学・文学部・准教授

研究者番号：30756276

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,600,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、哲学的真理論の分野で近年注目を集めている「真理の機能主義」に関する包括的研究の基礎段階として、次の三つの課題にとりくんだ：(i) 真理の機能主義の明確化と定式化、(ii) 思想史的研究、(iii) 具体的領域での応用。
このうち(i)の達成度は若干不十分な点があったが、(ii)については初期現象学と古典的プラグマティズムとの関連で十分な進展があり、(iii)についても特にTruthmaker理論との関連で具体的応用の基本的な道筋をつけることができた。

研究成果の概要(英文)：The present research aims to build a basis for the alethic functionalism, a position which is recently attracting attention in the philosophical literature on truth. To achieve this end, three tasks has been set: (i) formulation and clarification of the alethic functionalism; (ii) exploration of its historical background; (iii) application to several concrete domains.

Of these three, although (i) has been left in a somewhat unsatisfactory state, the other two went well. More precisely, our reserch has revealed (ii) a fruitful connection between the alethic functionalism and the tradition of early phenomenology and pragmatism, as well as (iii) an interesting application of the former into the truthmaker theory and problem of moral truth.

研究分野：現代哲学

キーワード：真理論 機能主義 多元主義 プラグマティズム 初期現象学

1. 研究開始当初の背景

哲学的真理論の中心問題は「真理とはどのような性質か」という問いである。この問いに対しては伝統的に、対応説、斉合説、検証説、プラグマティズム、等の立場からさまざまな提案がされてきた。だがこれらの伝統的理論には共通して、それぞれ特定の命題領域においてはもっともらしいが、その説得力は他の命題領域に移ると失われる、という問題点があった。

こうした事情から、20世紀の中盤から後半にかけて、伝統的な真理論の大前提を拒否する「真理のデフレ主義 deflationism」と呼ばれる立場が注目されるようになった (e.g., P.F. Strawson (1949) "Truth", P. Horwich (1998) *Truth*)。この立場によると、「真理」という真正な性質は実のところ存在せず、あるのはただ一定の表現的役割 (引用符解除や一般化など) を果たす言語的道具にすぎない。しかし、このデフレ主義に対しても、従来真理に認められてきた重要な説明機能 (行為の成功や文の意味に関する) が拒否されることになってしまうという批判や、真理について成り立つ規範的事実を捉えることができなくなるといった不満が表明された。こうしてデフレ主義も、一般的な支持を得るには至らなかった。

このように一種の行きづまりを見せていた真理論だが、近年この状況を打破すべくある画期的な提案がなされた。それは、真理という性質を、異なる命題領域ごとに異なる仕方を実現されるものと捉える「真理の機能主義」という立場である (e.g., M. Lynch (2009) *Truth as One and Many*)。真理の機能主義は、従来の真理論が抱えてきたさまざまな困難を統一的に解決しうる立場として、近年大きな注目を集めている (たとえばこの主題のアンソロジーとして、N. Pedersen & C.D. Wright (eds.) (2013) *Truth and Pluralism* がすでに出版されている)。しかしこの立場は、いまだ発案されてから間もないこともあり、正確な定式化、一般的な思想背景の中での位置づけ、応用可能性などの点に関していくつかの課題を抱えている。

2. 研究の目的

以上のような背景のもと、本研究では、将来における真理の機能主義の包括的な展開と擁護を見据えて、その基礎部分に当たる以下の三つの課題群を設定し、その達成を目指した。

(i) 内実の明確化と定式化：

真理の機能主義が従来の真理論と比べ魅力的な見通しを与えるという点は多くの者が認めるが、この立場が単なる「直観的描像」の段階にとどまらず一つの「理論」になるには、正確な定式化が不可欠である。

(ii) 思想史的観点からの研究：

報告者はすでにこれまで行ってきた研究

から、真理の機能主義へとつながる重要な洞察を含みながら従来その連関が見すごされてきた哲学的伝統が存在することを確信していた。この立場の基本的な動機づけや思想史的広がりをもさらに掘り起こすことは重要な貢献である。

(iii) 具体的領域への適用可能性の探究：

一般に、理論の実際の利点を明らかにするには、それを何らかの具体的な領域に適用してその効力を調べるのが欠かせない。本研究が主題とする真理の機能主義に関しても、いくつかの特定の命題領域における真理をこの立場がどう扱えるかを探究し、その効力を実地に示すことが重要である。

3. 研究の方法

上記の三つの課題の達成のため、それぞれ以下のような方針のもと研究を進めた。

まず課題 (i) に関しては、機能主義という考え方がそもそもはじめて登場し、またその後も継続的に議論が積み重ねられている心の哲学における論争状況を一つの主要な手がかりとしながら、真理の機能主義の明確化と定式化を目指すことにした。その叩き台としては、先述の Lynch (2009) *Truth as One and Many* において示唆されている定式化を用いることができるが、この定式化に対しては、すでに N. Pedersen & C.D. Wright (eds.) (2013) *Truth and Pluralism* に所収されたいくつかの論文による批判、ならびに改良についての提案などがある。そのため、真理の機能主義の最良の定式化を探るに当たっては、以上のような先行研究の内容を総合的にふまえて作業を進めることにした。

課題 (ii) に関しては、とりわけ初期現象学、ならびに古典的プラグマティズムという二つの思想的伝統との内的関連性を明らかにすることを目指した。この作業によって、それぞれの哲学的伝統を新たな角度から捉え直すことと同時に、翻って、真理の機能主義の理論的な動機づけと定式化 (上記の課題 i) に対しても固有のフィードバックを得ることを目標とした。

課題 (iii) に関しては、真理の機能主義が具体的な命題領域における真理に対してどう適用できるかを調べるため、とくに次の二つの領域を焦点をしばって考察を進めることにした。一つは、物理的外界に関する真理であり、なかでも対応説の現代的な有力形態とみなされている Truthmaker 理論を、真理の機能主義のもとで解釈する可能性を探った。もう一つは、道徳的命題領域における真理であり、これについては斉合説的な真理論との関連で、真理の機能主義の豊かな応用可能性を示すことを目指した。なお、本研究では期間の都合上以上の二つにしばったが、同様の作業は将来的には、数学、美的価値、自己知、過去、法、政治、フィクション、等の領域における真理にも拡張していくことが見込ま

れている。

4. 研究成果

上記の課題(i)に関しては、その成果の一部を下記の論文として発表した。そこでの成果を要約すれば、真理の機能主義の定式化には、主として言語哲学の領域で展開されてきた「概念役割意味論」、とくに推論主義の考えが有効な仕方でも活用できるということである。一方、当初計画していた心の哲学における機能主義のアイディアの活用に関しては、具体的成果として結実させるには至らなかったためこれは今後の課題とする。

課題(ii)に関しては当初の計画以上の成果を挙げることができ、これに関連するものとして、下記の雑誌論文と、学会発表、図書とを発表した。その主要な成果を概観的に述べると、まず論文では、C.S. パースや W. ジェイムズといった古典的プラグマティストの真理論は、経験の対象ではなく経験それ自体の領域において見いだされる一定の推論的パターンに着目して真理を特徴づけるものであり、真理の機能主義の萌芽的形態として理解できることを明らかにした。また論文においては、F. プレンターノが実質的に真理の実現性質の多元性を承認し、真理の機能主義を動機づけるポイントを先取りしていることを明らかにした。さらに図書の寄稿論文においては、E. フッサールによる物理的実在性の構成分析が、低次のノエマが織りなす機能的・全体論的連関に訴えるものであることを明らかにし、現象学の伝統と機能主義的発想とのつながりの一端を示した。

最後に課題(iii)に関連するものとしては、下記の雑誌論文と、学会発表、図書を発表した。その主要な成果を概観的に述べると、まず論文においては、道徳理論の真理性と実践性(行為指導性)の関連を明らかにすべく、自己抹消的と呼ばれるタイプの道徳理論の是非を検討した。また発表においては、物理的外界の真理性の説明として有力な対応説の現代的な洗練形態である Truthmaker 理論に注目した。この理論において、命題の真理はそれに対応する存在者の実在によって説明されるが、そのような存在者に関して部分関係の単調性を認めた場合、ある受け入れがたい帰結が生じる。このことを明らかにしたうえで、可変的部分構造を認める解決策を提案した。また論文においては、同じく Truthmaker 理論が、論理的に複雑な命題の真理の説明のために必要とする「形而上学的根拠づけ metaphysical grounding」という関係に注目した。同論文では、先行研究の多くで原始的概念として扱われるこの関係に対する分析方針として、因果論における統合説を応用する見解を提示した。この見解は、独立の意義をもつと同時に、真理の機能主義

と Truthmaker 理論の整合性を示すうえでも重要な観点であり、今後さらに詳細に展開していく必要のある論点である。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計4件)

秋葉剛史、根拠づけ(Grounding)に関する統合説、科学哲学 49(1)、2016、85-90。(査読あり)

秋葉剛史、自己抹消的な道徳理論の問題点は(あるとすれば)何か、応用倫理 9、2016、12-29。(査読あり)

秋葉 剛史、プレントナーノの真理論はどこに向かっていたのか、現象学年報 31、2015、89-97。(査読あり)

秋葉 剛史、真理論としてのプラグマティズムの可能性、現代思想 第43巻第11号、2015、107-119。(査読なし)

[学会発表](計4件)

秋葉 剛史、判断・真理・事態：フッサール全集第40巻『判断論についての研究』を読む、フッサール研究会特別企画「フッサールの新資料を読む(6)」、高千穂大学、2016年11月25日。

秋葉剛史、ライプニッツと高次因果の問題、哲学会 第55回研究発表大会シンポジウム「ライプニッツと現代形而上学」、東京大学本郷キャンパス、2016年10月30日。(招待あり)

AKIBA Takeshi, Truthmaking, Grounding, and Monotonicity、CAPE International Workshop: *Metaphysical Grounding and Fundamentality*、京都大学吉田キャンパス、2016年9月25日。(招待あり)

秋葉 剛史、分析哲学者の典型的なふるまいはどこから来るのか、一橋大学哲学・社会思想学会 第19回大会 シンポジウム「哲学研究の比較—方法・評価・教育の観点から」、一橋大学国立キャンパス、2016年6月4日。(招待あり)

[図書](計2件)

AKIBA Takeshi, Things and Reality: A Problem from Husserl's Constitutional Analysis, in N. de Warren, S. Taguchi (eds.),

Phenomenology in Japan, Springer,
forthcoming. (論文寄稿済、頁数未定)

秋葉剛史 他、よくわかる哲学・思想、柏
端達也・納富信留・檜垣立哉編、ミネル
ヴァ書房、2017年発行予定。(本研究代
表者は、「現代プラグマティズム」、「真理」
の二項目を執筆)

〔産業財産権〕

出願状況(計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況(計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

秋葉 剛史 (AKIBA, Takeshi)
千葉大学・文学部・准教授

研究者番号：30756276

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：

(4) 研究協力者

()